

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

秋風や観音堂の休み石

井上 郁子

〔評〕春風は身に吹いて感ずるもの、秋風は身を離れてさやかにおぼえるものだという、作者は観音堂の休み石に、どつかと腰を下ろしている。秋風、観音堂、休み石と羅列して他は何も述べてないが、それでいて、情景は極めて鮮明である。休み石と秋風との照応はまことに言い得て妙。

魯田や記憶の中の二毛作

楠目 哲郎

〔評〕魯田は刈りとった後に株芽の再生した田のことである。小さな穂が出て実るが米の味はよくない、鳩や鴉の餌になる程度のものである。南国と呼ばれる高知では、年にお米を二度収穫した時代もあったが、今はもう記憶の中だけに残る、郷愁の世界でしかない二毛作。

果てしなき空の広さや木守柿

渡辺万利子

〔評〕雲一つない晩秋の空、果てしなく広く青い。「見よ空高く」「仰ぐ大空」という表現等、甲子園球児等の校歌によく用いられている言葉。山脈も清流もない都会でも大空はある。採り残された柿の実が空に透けて赤く輝く。木守柿は、山の小鳥や小動物のために餌として取り残した二、三個の柿のことである。

夜長し古文の恋の佳境なり

伊藤 たみ

〔評〕古文の恋といえは差し詰め源氏物語ではなからうか。恋の過ちにおのきなながら、愛の遍歴に苦悩する前編と、暗い愛の世界を描く後編があり「ものあわれ」の世界を描写した日本の古典の最高峰とされしていると、国語辞典にあるが、作者の読んでいる古文が果たして源氏物語であるのかどうか推察の域を出ないが、夜長に読む古文「恋の佳境なり」とくれば必ずしも的はずれでもないように思える。秋の夜長古文の恋の佳境はまだまだ先に続いている。

点滴の向ふに夕焼けの海がある 間

浩太

にがり酒たしかに神はおんななり 大西 昇月

電線のしなう燕の別れかな 片岡 包女

晩秋や雨は静かに野を閉ざす 大川 節弥

見送れば友コスモスを高く振る 刈谷 志津

すれ違う歴史認識あきざくら 友草 水月

ガラス拭く映る秋思の顔も拭く 岡本とも子

猪囲い跨ぎて帰路を近道す 竹崎 光子

目薬を差して読みつく良夜かな 川村 博子

気がかりな月日刻みし障子貼る 川村千図子

小作りの延命地蔵赤まんま 津田 久美

野分雲とぶ空港の大硝子 松岡きよ子

寺の道白萩ゆれてこぼれけり 中野 好子

有明けの月静かなり虫すだく 川村 愛

コスモスや風の流れにさからわず 筒井 文

天高くマスト登りや万国旗 中屋 桜子

秋野菜蒔いて安堵の腰たたく 藤田 里野

その中の句碑に宿るか秋の虫 川上こよね

高原に笑顔いっばいぶどう狩り 筒井 眉躬

峰々の地主神社や滝の音 弘瀬うき子

配膳に彼岸団子を戴けり 大平 種香

教え子の顔つながらず後の月 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」五句

締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

お礼

日本大昭和板紙西日本株式会社高知工場様から
たくさんの災害用毛布を
ご寄附していただきました。
避難場所に備蓄し、
災害時に活用させていただきます。
ご寄附をいただきました。

総務課

いの町下八川丁154
7番地

藤岡 聡夫様から

故藤岡 ふじ糸様の香
典返しとして、特別養護
老人ホーム吾北荘へ多額
のご寄附をいただきました。

吾北荘

徳島市南沖洲3丁目11
番地22

向井 保子様から

特別養護老人ホーム偕
楽荘へ多額のご寄附をい
ただきました。

偕楽荘

紙上をもちまして、厚
くお礼申し上げます。